
異世界のゴミ屋敷

ナシオカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界のゴミ屋敷

【Nコード】

N1835Z

【作者名】

ナシオカ

【あらすじ】

バイトで異世界へ通っている高校生の、異世界日記。
元短編連作。ほのぼののコメディから、のちのちシリアスになりそうな予感。恋愛含みます。

白い椿の生垣をくぐると、そこは異世界だった。

僕は『長岡ハウスクリーニング』と印字されたファイルを引っ張り出して、もう一度確認した。

指示書には白坂理瀬という人物の名前、それから4LDK一軒家の全室掃除 水まわりは除くという旨。

付属している地図には、図ではなくて文章しか書かれてない。曰く、『二丁目の小沢さんち脇の路地に入って、白い椿の生垣をくぐって、一本道をまっすぐ』。

うん、確かに一本道だ。

道をカラフルに彩る、僕の背と同じくらいのデカさのタンポポらしき花。可憐な鈴蘭らしき花からは、薄緑色の霧が断続的に勢い良く吹き出している。

「……まあいいか」

いつの間にか口癖になってしまった言葉を呟く。色々と理不尽な事が多い人生なのだ。

一応鈴蘭もどきの霧にあたらないようにしながら一本道を進むと、一軒家が見えてきた。まるで童話に出てくる魔女の家のようにおどろおどろしい。しかし妙にピラミッド状に裾広がりの家だな、と思っ
ていると、近づいてから気づいた。裾広がってる部分、全部ゴミ
じゃん。なかなか気合が入ったゴミ屋敷だ。

これ特別手当出ないときついな……というか僕みたいな学生バイトの腰掛け掃除夫で間に合う物件だろうか。どう見てもプロ中のプロ

の仕事にふさわしい物件な気がするのだが。

まあダメなら持ち帰って、楠木さんあたりに回そうか。

頭の中でプロ中のプロ、掃除の鬼である先輩を思い描きながら僕はそのゴミ屋敷の扉を叩いた。予想していたことだが、叩いた手に粘着質な汚れがついた。

「こんにちはー。長岡ハウスクリーニングからきました、柿ノ木です」

ガタガタと内部で音がして、扉が開けられる。立っていたのは、僕と同じ年の頃の少女だった。ひつつめにした長い黒髪に指紋で汚れた眼鏡、疲れているのか、顔色が悪い。シンプルな元は黒かっただろうワンピースを着ている。元はというのは、ほこり汚れでもはやグレーの服になっているからだ。

僕は愛想笑いを作った。

「お客様、白坂理瀬さんでいらっしゃいますか？」

「はい……魔女の白坂です。本当、すみません……」

のっけから謝られた。というか魔女か。魔女なのか。

「ちょっとわたし疲れてて。お掃除好きのメイドさん出てこい！なんていう召喚魔法を冗談で唱えたら、なんか変な伝言魔法になっちゃったみたいで……わたし、ちゃんと自分で掃除しなきゃって思ってたんですけど」

色々突っ込みどころはあるが、僕は愛想笑いをさらに深めた。

「いえ、そのために我々がいるのですから。あ、申し遅れました、僕は柿ノ木拓海といいます。今日一日、どうぞよろしくお願いしま

す。ええと、上がったてもよろしいですか。全室掃除とお聞きしましたが、どこからがいいか希望はありますか」

「いやもう、本当にどこからでも」

ぺこりと彼女が頭を下げる。その際にハラハラとフケが雪のように儚く舞った……いや美しく言っても汚いものは汚いな。

しかしどうしよう。水まわりはしなくていいそうだが、風呂入ってなさそうな同年代の女性って本人相当きつくはないか。

……まあいいか。僕には関係ないことだ。

僕は室内を見渡した。

二階建ての一階、LDK部分にはキッチン部分といわずテーブル部分といわず、食器や調理器具や訳のわからない道具のようなものが積み重なっている。床にこぼれ落ちたらしき皿の破片なども転がっている。

「どう見ても使えない割れ物や食料などはゴミにしてもいいですか」
「はい。本当、すみません。こんなに散らかしたつもりじゃないんですけど、その、仕事が忙しかったんで……。でももしかしたら、どこかから入った魔獣か妖精が散らかしてるのかも……」

僕は曖昧な笑みで「そうかもしれないですね」とだけ答えた。こういうふうには、散らかっている自分の部屋に対して言い訳をする人はとても多い。こちらは商売で掃除をしているのだから、むしろ「理由なんかないけど散らかしてやったぜ！」くらいの態度でもいいと思うのだが。

ともかく、僕は腕まくりをして、笑顔で彼女に告げた。

「ゴミにするかどうか迷うものがあつたらお呼びしますから、別のお部屋にいらして結構ですよ」

彼女はまたペコリと頭を下げ、「じゃあ、隣の部屋にいますから」と申し訳なさげに去っていった。

しかし、すごい。

業務用のゴミ袋にゴミとそれ以外を分別しながら通り道を確保している僕は、久々に無力感を味わいそうになっていた。何だろう、ものすごく高い山を前にした気持ちというか。心折れちゃう的な。

こういう時プロな楠木さんなら、山キチな登山家のごとく頬を紅潮させて興奮状態で挑むだろうに。

ここが異世界の魔女の家であることも僕らの精神を削っていく。

なにしろ、妙なものがあるのだ。

かさぶたのように汚れがこびりついている鍋に、どう見てもマンドラゴラってやつじゃねって感じの人面ゴボウのようなものが入っていたり。キラキラしたルビーっぽいものやエメラルドっぽいものが落ちていたり。ポツケにナイナイしたくなるじゃないか。いやいや信用第一信用第一。呟きながら続けていると、珍しく汚れていない人形を発見してむんずと掴んだら「ギヤーツ！」とその人形自身に叫ばれたり。こつちがギヤーツ！である。

「これは何だろう……捨ててもいいのかな」

テーブル上に放置された布でくるまれた何か。なんとなく嫌な予感がするなあ……と思いつつ、恐る恐る開いて、その予感は的中した。ヒツと息を飲んで、包みを取り落とす。ゴツンと音がして中身がバラバラと転がった。ビー玉が詰まった瓶を落としたように、四方八方へと転がる　目玉。

「ひ、」

「お茶……あー！　すみません！」

白坂さんが小走りにやってきて、足元に屈む。一生懸命目玉を拾い上げている彼女の頭に、僕は問うた。

「あの……それは？」

彼女は満面の笑みで（たぶん。曇った眼鏡と前髪のせいで口元しか見えないのだが）、答えた。

「あ、これですか？ 珍しいでしょう。ベアルコールの目玉です。ほら、熊に似た魔獣ですよ。これはすり潰して他の材料と一緒に固めるといい杖になるんですよ。爆発系なら倍の威力になるって、軍属の魔法使いによく売れてて……ふふふ」

「そうなんですか」

ニマニマと口元を動かす彼女は、どう見ても気持ち悪い。フケだらけ、ホコリまみれ、曇った眼鏡に束になって固まった前髪、そして手には目玉。お客様に失礼だが、これはひどい。

目をそらしつつ、僕は割れた皿などをゴミ袋に突っ込んでゆく。ああ忙しい忙しい。忙しいから何も考えないぞ。僕は何も見ない、見ない……しかし、それでも屈んでいる彼女の首の後ろの部分の襟がとっても汚れているのは目に入ってしまうのだ。

「……白坂さん、一人暮らしですか？」

「わたしですか？ はい。あの、姉はいますが戦争に行ってるから家には滅多に……。両親はもういませんし。あつ、こんなところにも！ 目玉ちゃん、隠れちゃダメですよ」ヒッヒッヒ、悪い魔女が捕まえちゃうぞお」

ヒッヒッヒじゃねえ。

「……………あの、風呂どこですか？」

「は？」

僕は、とうとう負けた。

だって女の子がこんなに汚いのは、だめじゃないか。

彼女が全く可愛くも綺麗でもなさそうなのに、要領も悪そうなのが、更に僕の同情を誘った。美人でさばけた女性が汚れているならきつと僕は同情しなかった。彼女だからこそ、なんだか哀れになったのだ。

「あのですね、今サービスで風呂掃除もやってるんですが、風呂はどちらですか」

「えっ。お風呂！？ いいですよ、そんな汚い事はヨソ様にはさせられないです。わたし、自分で出来ますから」

賭けてもいいが、出来ないだろう。

僕はゴミ袋をどさりと床において、風呂を探しはじめた。

「いいですから。どこですか？ あ、けて女性の風呂を掃除したなんていう邪まな動機ではありませんので」

「いや、それはもう……！ ああっ、開けちゃだめですって！」

あたりをつけるとビンゴだった。うん、汚い。だが、ここは臨時の物置にされているという様子だけで、ゴミをどければまだ清潔なようだった。

「あ、どいてもらえます？ これなら三十分ほどで片付きますから」

有無を言わせず、彼女の目の前で扉をピシャリと閉めた。

結局、本日の仕事はゴミ撤去と風呂掃除だけで終わってしまった……。

僕はゴミ袋をまとめ、掃除道具を片付けながら会社になんて言おうか考えていた。まあ散らかり方が並じゃなかったんだから、一部屋＋風呂のみでも仕方ないだろうが。

白坂さんは僕が片付けたLDKから出てきた茶道具で、お茶を入れてくれた。さすがに口を付けられなかった僕に、寂しそうに微笑んでいたの、少し良心が疼いた。が、僕は胃腸が弱いのでホントすみません。

「では日も暮れてきましたので、本日はこれでお暇します」

「本当にすみません……」

「お風呂、綺麗になりましたから」

「本当にすみません……」

今日、何度すみませんって言葉を聞いただろうか。

白坂さんは肩を縮こめて、上目遣い（たぶん。指紋で曇った眼鏡で略）で僕を見た。

「あの、またお掃除の続きって来てもらえるんでしょうか……」

勿論です。商売ですから。

につこりと笑みを浮かべて頷くと、あからさまにホツとされてしまった。そしてハツと気づいたようにして、ワンピースのポケットをまさぐる。そして、何かを握りしめて、僕へと差し出す。

「これ！ お代金です！ 今お金の持ち合わせがないからこれで！」

手に押し付けられたのは、小石だった。

「……………え、何ですかコレ」

「えっ？ 魔石ですよ」

「……………」

黙り込んだ僕に、彼女は何を思ったのか慈愛深き微笑を見せた。

「そっか、柿ノ木さんって田舎の子なんだね。もしかして出稼ぎに出てきたばかり？ あのね、田舎の店では砂状になって店で売ってるけど、魔石って本当はこんなふうに塊になってるんだよ」

いや、そうじゃなくて。こんな石ころ貰っても僕困ります。金無いんだったらさっきの宝石とか貰っていきますよ、おい。というか突然のタメ口にもイラツとくるわあ。田舎者なめてやがりますね。調子に乗りやがって。いや僕は異世界人であって田舎者じゃないが。文句を言おうと思ったけれど、「柿ノ木さんもそのうち徴兵があるよね？ これだけあったら薬剤師ギルドでエクストラポジション買えるよ！」と言われて言葉をひっこめた。エクストラポジション。何そのときめく単語は。

「……………まいどありー」

「うん。またよろしくね！」

僕は大事に手のひらの小石を握りこんで、にっこり笑った。彼女も満足そうに頷く。

その足で教えてもらったギルドへ向かい、僕がエクストラポジションとやらを手に入れ、それを高値で医師をやってる兄に売りさばいた結果、大騒動になるのはまた別の話。

「じゃあ、適当にお願いするよ。お任せするから。別に背の高さで分けて並べてもいいし、色でもいいし、中身……は専門家じゃないと分からないからねえ。まあ、本当に適当でいいから。見栄えだけ整えてよ」

本棚の話である。

僕は今、白い椿の生垣をくぐった先にある異世界の薬剤師ギルドにお邪魔している。事務員のおじさんが、にこやかに迎えてくれた。白坂さんはどうやら僕のことを宣伝してくれたらしく、彼女を経由して僕に指名で仕事依頼が来たのだ。内容は薬剤師ギルド内図書室の整理整頓。

ちなみに、どうやって長岡ハウスクリーニングに依頼しているのか白坂さんに聞いてみた。

会話が出来る伝言魔法というのがあって、一度繋がった先には何度でも繋げることが可能だそうだ。僕、異世界から来てるんですけど、と言ったら笑われた。「異世界には小沢さんちの路地なんて無いでしょ」だって。あるから来てるんですけど。

薬剤師ギルドというのは、日本によくある和風建築の立派なお屋敷だった。テレビでよく見る高級旅館みたいな感じ。白坂さんとは全く違う趣だが、むしろこの世界は時代劇で見るとような和風建築ばかりであって、彼女の家の方がおかしい。

白坂さんは変人っぽいから、たぶん親も変人で外国かぶれ(?)な家を建てちゃったんだろうなあ……。

そんな事を考えながら、僕は背の高さで本の分類を進めていた。スツと直線的に並んだ本って美しいから。

しばらく経った頃、背後から声をかけられた。

「ねえ。柿ノ木拓海って、あんたなの？」

振り返ると、ちょっと綺麗な いや、かなり綺麗な女の子が立っていた。扉に背を預け、両腕を組んだその姿は、ザ・お嬢様！ っ て感じだ。

仕立ての良さそうな制服っぽいブレザーにプリーツスカート、パリッとした白いシャツに絹のネクタイ。靴は顔が映りそうなほどピカピカに磨かれている。

キラキラ光って揺れているピアス。ゆるく巻いた髪が肩にかかり、ツンとした鼻をしている。なんというか、立ち姿全体が「苦勞してません！」と宣言している。上流階級の匂いがプンプンするぜえ。

「はあ」

「へえ。そうなんだ。ふーん……」

図書室内に入ってきて、興味なさげに指先で本をなぞる。そのけだるい仕草がやたらと様になっている。退屈しきった貴族のお姫様ってこんなのかもな。

「意外だったなあ」

「何が？」

タメ口なのでこっちもタメ口で返す。白坂さんは客だけど、この子は違うし。

「噂によると白坂のカレシっていうから、どんな変人かと思って見に来たのに」

「は？ 彼氏じゃないけど」

「いって、そういうのは」

ヒラヒラと片手を振る。いや、本当に違うんだけど。

彼女はドサツと椅子に腰を下ろした。もう既に僕に興味を持ってない空気だ。

だから僕も気にせずに本の整理を続けていた。そうしていると、また声をかけられる。

「あの子さあ」

「へ？」

「白坂理瀬。あの子、わたしのライバルだったのよ」

「ふうん」

「わたしのライバルだったの。平民のくせに」

彼女は静かな声で繰り返した。視線はぼんやりと窓に向けられている。だが景色を楽しんでいる風では無かった。

というか、平民って言ったな。じゃあこの世界は身分制があるのか。あながち退屈した貴族みたいってというのが外れてないのかもな。

「いつも成績争いしてたの。なのに、突然学校辞めちゃってさあ。

理由聞けば親が死んでお金が無いから働く、だって。バカみたい。

……わたしに頼めば学費くらい出してやったわよ」

「……………」

「あの子、元気なの？」

風呂も入る暇が無いほど働いてます、とは言えまい。僕は曖昧に頷いた。

「そっか……。わたしのこと、何か言ってた？」

それはさり気なさを装って聞かれたが、彼女がそれをとっても気にしているのは明らかだった。

「えーと、僕はきみの名前を知らない」

「ああ、わたしは堂本百合子」

少し迷ったが、僕は「そういえば話に出てきたかもしれない」と言ってしまった。

「本当？　なんて？」

「なんて言ってたかな……いいライバルだとか、君に負けないように頑張らないとかさそういうこと」

堂本さんは、それを聞いて目を丸くした後に、華やかな笑みを浮かべた。おお、図書室がパツと明るくなったようだ。美人の笑顔はすごいな。

「そう。ありがとう」

「いや、大したこと覚えてなくてごめんね」

背を向けて作業を再開する。ふと『基礎魔法　基本のき』という本があつて、そつと脇に避けておいた。これはちよつと読んでみたい。もしかして僕にも魔法が使えたりして。

ウキウキしていて、堂本さんがすぐ後ろに立っていることにも気づかなかった。フツと耳に息を吹きかけられて、ぎよつとする。

「な、何？」

「悔しい」

「何が？」

「わたしの事知らないのに優しくしてくれた人は初めてだから」

だから、の所で、頬に柔らかいものが当たった。温かい息が頬を掠めたかと思つた瞬間に唇が押し付けられるスマートな、

キス？ 今僕、キスされた？

異世界どころか異星人を見る目で、僕は去つてゆく堂本さんの背中を眺める。ふと扉の所で振り返つた堂本さんは言った。

「白坂はわたしのことなんか、ライバルだと思つてないよ。だからそんなこと絶対言わないんだ」

またね、とヒラリと手を振つて出てゆく。なんと粋な。ちょっとときめいちゃったじゃないか。

本当に僕と同年代なのか。いやむしろあれで白坂さんと同じ年つて動揺した僕は、仕事帰りに借りて帰ろうと思つていた基礎魔法の本の件はすっかり忘れていたのだった。

ところで、お金事情である。

白坂さんからは最初こそ魔石だったが今は現物支給で白坂印のお手製ポーションを貰っている。薬剤師ギルドで買えるものよりも質が落ちるそうだが、兄には好評で……って、話がそれだが、異世界にもお金はある。あれから数回通った薬剤師ギルドからの報酬はれっきとした金だった。壱万円と書いてある。しかし、だ。

「うーん……誰だよ」

凝ったデザインの紙幣を陽に透かすと、立体ホログラムのようにポワンと人物の顔が浮かんでくる。福沢諭吉じゃない。全く見覚えがないお爺さんの絵だ。当然ながらこちらの世界では使えないだろう。しかし困った。

僕は自室のベッドの上で胡坐をかいて、唸った。

長岡ハウスクリーニングは、幹旋業者である。僕は会社から連絡を受けて依頼主のもとで仕事をし、報酬を得て、その中から会社へと幹旋手数料をバックする。

指名で入ってくる仕事が最優先されるので、近頃の僕の仕事は白坂さんのところばかりだった。

ポーションが兄に高値で売れるので問題視していなかったが、やはり仕事先が異世界というのはリスクだ。どうするこの壱万円。

「また薬剤師ギルドでいいポーション買って兄さんに売りつけるか……」

僕ってつまらない男だな、と自分で言っただけで思ってた。
だから。

「おおっ、すごい。ここがフリーマーケットか」

「うん、そう。一万あればかなり買えるよ。わたしも掘り出し物探さないとなあ。今月ちよつと厳しいんだよね。休戦しちゃったから軍部のお買い上げが無くてさ……。目ぼしいモノを転売したい」

そういうわけで、白坂さんと一緒に異世界のフリマに来ています。若干世知辛い発言もあったが気にしない！　なんかテンション上がってきた。

白坂さんは、僕が通うようになってからは風呂にも入っているし、初対面よりは小綺麗な格好をしている。眼鏡は汚れてないし、黒髪をふたつにくくって、そのまま垂らしている。

こうしてすっきりした白坂さんは、実は結構可愛らしい。地味なんだが、透き通るような肌の白さだし、目元も切れ長だし。

服装はシンプルなシャツにレースの縁取りがついたスカートだ。魔女といっても黒ばかり着ているわけじゃないようだ。

「じゃあ別々に回る？」

僕が提案すると、白坂さんはぶんぶん頷いた。本当にお金に困ってるんだな……。それなのに僕への仕事依頼があるところを見ると、もう汚い部屋は耐えられないんだらうけど。

しばらくブラブラと歩いて、出品物を眺める。

こっちでいう科学の位置に魔法があるだけあって、色々面白い魔法具が沢山出ている。食器が多いかな。喋り相手をしてくれる湯の

み、手を近づけると実を割って差し出してくれるくるみ割り人形、お、これはきれいだ。常に生花が縁取りに咲いている皿。しかし洗いにくそう。

食器も楽しいが、僕は料理なんて全然しないからあまり興味がない。

「なんか面白い物ないかな……」

食器、食器、また食器、本、本、調理道具、楽器、服……。

うろついていると、大体の出品物カテゴリによる場所なんかが分かってくる。本、の所で薬剤師ギルドで借りそこねてそのままになっている魔法の基礎本を思い出した。

本にするか、と僕はきた道を戻った。中でも一番きれいな絨毯を敷いて商売している男のところへと進んでいく。

四十歳くらいの作務衣を着た男が、僕を見て目だけで微笑んだ。

「いらつしゃい。何か探してるの？」

「いや、特には……魔法の基礎がわかる本なんかがあったら欲しいと思って」

「ああ、それなら幾つかあるよ。分かりやすいのはこれとこれ……あと、こっちは分かりにくいけど安い。ははは」

誠実そうなおじさんだ。僕もおじさんに合わせて少し笑って、それから分かりやすいという本を手についた。奇遇にも、それは『魔法 基本のき』だ。思わず口元を緩めた僕に、おじさんが一冊の本を取り出してきた。

「でもね、一番のおすすめはこれ。この本は本当に分かりやすい。初心者にはぴったりだ」

緑色の布カバーを施された、少し分厚い本だ。

中身を見てごらん、と言われてその本に手を伸ばした　所で、バシュッ！！と物凄い音が僕の耳元をすり抜けていった。耳元の髪が風圧で揺れるほどの勢いで、何かが飛んできたのだ。

「柿ノ木さん！　伏せて！　『炎神・風花矢』！」

白坂さんの声に反射的に上体を伏せる。その上をまた轟音が過ぎ去ってゆく。そしてさつきと違い、風圧が熱い。

「ギャツ！　な、何を乱暴な……！」

おじさんの声が聞こえて、顔を上げて僕は呆然とした。

絨毯に並べていた全ての本が絨毯ごと燃えている。おじさんの作務衣にも燃え移っている。そして僕が手に取ろうとしていたあの緑の本が、もはや消し炭になっているじゃないか。

白坂さんは呆れた顔で両手を腰に当てて、僕を見下ろした。

「もう、柿ノ木さんってば。ダメじゃない。こんな見え見えの詐欺にひっかかつちゃ」

「え……？」

「見え見えだけど、命だつて危ないんだからね。　これ。さつきの緑の本。これは人の魔力を吸い取る魔方陣がそのまま本という形になってるんだよ。見たら分かるじゃない」

いや、分からないから。

何も言わない僕に、白坂さんはふつと溜息をついた。なに、「もうわたしがいなきゃダメなんだから」みたいなその顔。地味っ子のくせに、元ゴミ屋敷住人のくせに。

「まあ柿ノ木さんは田舎の子だから仕方ないよね……。あ、警察の

方ー！　ここですー！」

田舎の子じゃねえ。

助けてくれてありがとぅ、と素直に言うタイミングを失った僕だった。

白坂さんに帰りに薬剤師ギルドに寄ってもらい、白坂さんに交渉してもらって基礎魔法の本を安くギルドの人に譲ってもらい、白坂さんの紹介で入った信用のある店で色々な雑貨と本を買って、白坂さんにおんぶにだっこの僕の一日が終わろうとしていた。
しかも「今日は危ない目に遭ったから」と、小沢さんの路地まで送ってもらってまったく僕ってやつぁ……。

「じゃあ、ここだね」

ニコニコしている白坂さんに、僕は切り出した。

「あの……今日、すごかったね、白坂さん。魔法使っちゃったね」
「え？　ああ。柿ノ木さんは魔法もあんまり知らないんだったね。」
うん、使っちゃってたよ」

「ポーシオンは英語なのに、呪文は日本語なんだ」

「うん、あの魔法はわたしのオリジナルだからね。普通は英語だよ。世界共通語だし」

「……………」

オリジナル。なんか……魔法の事なんか僕には全然分からないが、なんか……白坂さんって、すごいんじゃないの？　こないだ、例のお嬢様も言ってたし。あ、そっぴやそのこと忘れてたな。

「あのさ、白坂さん。堂本百合子って知ってる？ この前会ったんだけど、白坂さんの事聞いてきた。心配してるみたいだったよ」
「えー？」

白坂さんは眉を寄せて、空を仰いだ。うーん、堂本、堂本……と唸っている。

「ああ思い出した、思い出した。堂本さんか。いたね、そういう人」
「……………」

「綺麗な子で目立ってたよね、だから思い出せたよ。なんか何度か喋りかけてきたような……違ったかな、別人かも」

……白坂さん。僕は今猛烈に堂本さんに同情した。

白坂さん衝撃の「いたね、そういう人」事件により、僕はそのままふらりと帰宅した。そして、気がついた。

「あ、結局お礼言ってない……………」

さて、僕の目の前には異世界の魔法書が数冊ある。

『基礎魔法 基本のき』、『選ばれし炎の使い手』、『誰でもわかる！ 図解水魔法』、『治癒魔法とともに』。

この数冊を読んで、大体のところがザックリとは分かった。

まず、当然ながら魔力がないと魔法は使えない。その魔力とは運動能力のようなもので人によって違う。人種によっても結構違うらしい。モンゴロイドは平均的、インド系はちよつと高め、スーミは飛び抜けて高い。スーミって何だ。異世界固有種か。

地図も買えば良かった。とりあえずあの世界でも日本は日本みたいだけど。

で、魔法だ。

魔法は魔法、ゼーんぶ魔法なんだが、学習体系は大まかに4つに分けられている。なんと、小学校三年生から科が分かれている徹底ぶりだ。理論や学習法が全く違うそうだ。そして、それまでに全員が基本の風魔法を習っている。

で、三年になって分かれる科の1つが炎。白坂さんがフリマで使ったのも炎だろう。

2つめが水。3つめが土。4つめが治癒で、この中の一つの職業が薬剤師らしい。習熟度によってレベル分けされていて、一番下のレベル1からレベル9まである。

「とりあえず、僕は風魔法からやればいいんだよな。まあ基礎魔法が風魔法なんだけど」

ドキドキする。僕、魔力つてあるんだろうか。異世界だから無理だったりして。

『基礎魔法 基本のき』を開き、最初の一章かかって説明している

通りに、目を閉じて神経を左手の薬指に集中する。どうも杖なしで魔法を発動するときは、左手の薬指を使うのがセオリーみたいだ。じっと目を閉じて、左手の薬指が暖かく感じるまで集中……。

あ。ちよつと温かい、かも？

えーと、その後は、そよ風が教科書をめくる様を額が痛くなるくらいにイメージする。最初はそうやって発動のコツを掴むこと。よし、イメージ。イメージ。イメージ……イメージ……。額が痛くなるまで、三十分かった。

「よ、よし……」

薬指だけを残し、他の指はゆるく握りこむ。その指を本に向け、小さな声で唱えた。

「ウインド」

ふわん、と風が起こった。そしてページが一枚ゆつくりと捲られる。

「！……！」

すごい。僕、魔法使えた。

ページ一枚捲るのに三十分かかって頭も痛いし何か身体もだるいけど、使えた！ スッゲー！ 自分で捲ったほうが楽だけどスッゲー！ひとしきり興奮して、ベッドの上をゴロゴロ転がる。

そして、ぴたりと止まって枕をポンポンと整え、布団に入った。

「はー楽しかった。さ、寝るか」

感動を誰かと共有できないと、こんなもんである。すぐに冷静になった僕は、すやすやと眠りについたのであった。

「えーっ！ 魔法が使えたの！？」

「はい、使えたんです」

白坂さんちに仕事に来ている。オフで会ったフリマの時はタメ口だったが、今はお客様なので丁寧語で答える。

魔法の件を話すと、白坂さんは大仰に驚いてくれた。

「すごいよ！ その年まで魔法知らない子って普通は使えないよ！

もしかして柿ノ木さん、才能あるのかも！」

「え、でも皆小学校で習うんですよね？」

白坂さんが何言っただコイツみたいな顔をした。

「田舎に小学校なんか無いから柿ノ木さんは魔法の事あんまり知らないんじゃないでしょうか」

なるほど。田舎に学校が無い、と。なんともすごい格差社会だ。

僕はそろそろ地面が見えてきた家周辺のゴミを分別しつつ、この世界について考えた。そういえば戦争とか徴兵とか物騒な単語も出てたような。異世界人だし、僕に関係ないことだから聞き流してただ。

戦争って、どこしてるんだろう。

考えていると、部屋の窓から顔だけ出して喋っている白坂さんが、いたずらっ子のような目で提案してきた。

「ね、掃除は後でいいから魔法ちよつと使ってみて」

「そんなことだからこんなに散らかったんですね」

「う……うん……ま、まあいいよそれは。ちよつと見てみたいから。柿ノ木さんも見せたいんじゃない？」

まあ、それはそうだけど。

「今日まとめたゴミを収集所に持って行って仕事終わりにしますから。その後で」

「じゃ、おやつ用意しといてあげる。それ食べてからやる！」

楽しみ、と白坂さんが顔を引っ込めた。

白坂さんは、お茶と菓子を用意して待っていてくれた。最初は口を付ける勇気が無かったそれを、今は普通に頂いている。いや、今は普通にきれいなキッチンに生まれ変わっているのだ。

今日の白坂さんは、薄いグレーのワンピースに白い毛系のカーディガンを羽織っている。可愛いが、やっぱり地味だ。カーディガン、毛玉だらけだし。多分ワンピースが多いのも楽だからとかそういう理由だろう。

「そっいえば白坂さんって専門は炎？」

「まあ得意なのはそうだけど。でも全部出来るよ。だから魔女なんだし……って言っても分からないよね」

「うん、分からない」

「えーっとね、魔法使い……わたしは自分を魔女だっけ言うけど、まあ一般は魔法使いだね。魔法使って名乗れるのは、風は基本として炎・水・土・治癒、4つの全ての魔法をレベル4まで使える人のことなの。あと、1つの魔法でもレベル7まで到達すれば魔法使いだけど、そんな人殆どいない。この決まりは全世界で共通」

「へえ。魔法使って多いの？」

「うーん……あんまりいない、かも。この国だと全人口の0・05%くらいかな」

「エリートじゃん、白坂さん」

「そりゃまあ、死ぬ思いで努力したからね……わたしは魔力がそんな多いわけじゃないから、本当に死にそうなくらいの努力しないとダメだったんだ。でもそれだけやる見返りがあるんだ。魔法使いは色々特権や就ける特別職があつて、普通は皆お金持ちなんだよ。ほんと、普通はね……ハハ……」

「前から聞きたかったけど、白坂さんはどうして貧乏なの？」

ちよつと聞いてほしそうだったので、ズバツと聞いてみた。白坂さんの身体が前のめりになる。顔を近づけられてのけぞってしまう。いくら白坂さんとはいえ、女の子に近づかれると身構えてしまうのは仕方ないだろう。

「それだよ！ わたし、両親がいないのは話したっけ？」

「うん、初日に聞いた」

「まあ詳しく言うとな長くなるから簡単に言っけどさ、その死んだ両親の身柄引き取るのにお金があるんだ。お墓も建てなきゃだし、ほつとくわけにいかないからね。お姉ちゃんもその為に徴兵前に志願して兵士やって稼いでるの。本当に大変なんだよー。まったく、勝

手に死なれて大迷惑だ！ 柿ノ木さんもそう思うよね！」

よく分からない話だ。だがわざわざ簡単にした話に突っ込んで詳しく話せというのは気が引ける。

白坂さんは手についたクツキー（買ってきたものだ。白坂さんは僕と同じく、全く料理が出来ない）のカスをパラパラと落として、立ち上がり、そばにあったA4くらいの白い紙をテーブルの上に置いた。

「じゃあそろそろメインイベントってことで。柿ノ木さん」

おお。では、ちょっと集中しますか。

薬指に集中、次は額が痛くなるほどそよ風をイメージ……って、あれ？　なんかやたら早く額が痛くなったな。十秒かかってない気がする。ふわん、という風じゃ寂しいな。じゃあもう少し強めの、髪が風になびくような感じをイメージしよう。

春の風、髪がなびくくらい。桜が散るくらい。そういえば桜、今年は早いって言ってたな。近所の公園の桜は綺麗なんだよな。

風、舞い散る桜、風。集中して

「ウインド」

紙を指さして、呟いた。

自室で起こしたより強い風が紙を飛ばす。白坂さんは紙を目で追い、笑顔で僕を見た。舞い上がった紙がひらりと落ちてくるのを指で挟み、「すごく綺麗な風だったよ」と褒めてくれた。

いや、何だか想像以上に嬉しいんだけど。

だから僕は照れつつ「まあ、基礎だから、基礎」とお茶に手を伸ばす。白坂さんを窺うと、彼女は僕が飛ばした白い紙をじっと見て、何か白いものを摘むようにした。その白いものを指先で擦り、匂い

を嗅ぐ。

「白坂さん？ 何してんの」

「……ら？」

「え？」

「本物……、なぜ？ 風魔法レベル5の移動魔法……違う、特殊魔法・レベル3召喚魔法は同じ質量の贄がいるはず……」

「どうかした、白坂さん」

ブツブツと呟きながら、白坂さんは目を伏せて指を擦る。

「白坂さん！」

大きめの僕の声に、白坂さんは弾かれたようにハッと顔を上げた。さっきまでの笑顔の名残は全くない。顔色は白く、目に力がない。

「どうしかした？ 僕の魔法、なんか変だった？」

白坂さんは、数秒、迷ったように唇を開いては閉じる。まるで何かを伝えるかのように。だが、結局ゆるく頭を振った。

「何でもない」

その後、白坂さんはいつも通りの口調で「そこまで送るよ」と立ち上がった。

何だか追い出されるみたいだと思いつつ、僕も素直について行く。道の途中で白坂さんは言った。

「魔法さ、わたしが教えてあげようか」

「え、いいよ別に。白坂さん忙しいし」

「でも、魔法のレベル上げたら仕事の幅広がるよ。いい暮らし出来ると思うし、仕送りとかしてるんだったら助かると思うよ」

「ええー、でも金取るんだろ」

笑って言うと、白坂さんは「取らないよ！」と勢い込んで言う。

「取らないからさ、今度から掃除の仕事が無くてもうちにおいでよ。うちに来てくれる様子からして、土日以外は何か別の仕事してるんだよね？　それが終わってからでもいいし」

勢いに押されるようにして、僕は頷く。

「それでいいなら、僕はありがたいけど」

「じゃあ、決まりだね」

いつもの小沢さんち付近で僕達は別れる。

生垣をくぐって、彼女の背中が見えないことは分かっていたけど、僕は後ろを振り返った。

彼女は送ってくれている間、一度も僕の顔を見なかった。

僕は察しの悪い人間ではない。

そして、白坂さんは多分腹芸とか悪巧みが苦手な人間だ。

「人を利用したことなんか一度もないんだろうなあ……」

白坂さんはそういう幼い目をしている。僕のまわりはたとえ同年代でも大人の目をした奴らばかりなので、僕にはそれがとても良く分かった。いや、周りのせいにしてはいけない。僕が小狡い小汚い小賢しい性格をしているので、良く分かったのだ。

白坂さんは何かを隠している。今日の僕の魔法に何かがあってその何かは白坂さんにとって重要なものなのだろう。

まあいいか。

口癖を呟いて、僕は寝返りを打った。

今日の良心が痛んでいたたまれない！神よわたしをお許してください！みたいな顔した白坂さんは、今まで見た白坂さんの中では一番可愛くて、地味っ子白坂さんのくせにキュンとさせられたし。それにタダで魔法を教えてくれるのは願ってもない。

僕はあくびをして、目を閉じた。

しばらくは、貧乏コンビで頑張るとしますか。幸い明日から春休みだ。魔法の特訓期間だとも思っただけでやる気出して

と思っていた矢先に、事件は起こった。

白坂さんちにお邪魔するのは大体一週間に一度のペースだった。そ

の間にこちらでは椿も散り、春が訪れていた。

高校3年生。受験生である。

我が家の家族構成は、両親と兄、僕、妹だ。両親はあまり流行らないカレー屋（そのカレー屋は去年まではカフェ、その前はラーメン屋だった）を営み、兄は内科医、妹は高校1年生だ。

両親の迷走する経営遍歴から想像はつくだろうが、うちは貧乏である。年が離れた兄が医師になるのが遅ければ妹は今のような私立のちよつといい感じの女子高になんか通ってなかっただろう。

そして、兄は両親とは違いしっかり者で　まあ兄は両親とは血が繋がってないので似ている訳もないが、とにかく僕と妹には口うるさく勉強しろ勉強しろと言うのが兄だった。

その兄が、最近勉強しろと言わない。

というか、昨日気づいたのだが、近頃朝も夜も兄の顔を見ない。

朝はギリギリまで自室にこもり、帰宅時間は早くなり、だが帰ってから自室にずっとこもっている。つまり、最低限仕事は行っているが、それ以外引きこもり。

「トモ兄ちゃん、夕飯とかどうしてんのかな……。もう一緒に食べなくなつて、一週間だよ。タク兄ちゃんも気づいてるよね」

両親のカレー屋で夕食中、妹の春香が心配そうに呟く。僕も真剣な顔で頷いた。つい昨日気づいたばかりだ。

「まあ兄さんはしっかりしてるから、そんなに心配はしてないけど。だってあの人が、すごく真面目な人だし。真面目を固めて服着せたら兄さんだし。僕、バイトだって清掃なら社会勉強になるだろうとかってやっと許可貰ったんだぞ。たぶん何か買い込んで部屋で食ってるだろ」

「そうかな。何か研究とかしてるのかな、部屋で」

「部屋で研究はしないだろ。兄さん大学病院勤務だよ？　なんか、

遅咲きのオタクになったとか。アニメとかにハマってるとか」

「トモ兄ちゃんはアニメ見ないよ。ラピユタだって見たことないんだよ！」

「嘘！ ラピユタ見たことないの！？」

「そうだよ！」

マジかよ。それはちょっと心配だ、ってそっちじゃなくて。

でも兄さんだっといういい年をした大人だ。家族だからといって、一週間顔を見せないからどうのこうのと干渉するのは憚られる。

「まあ、まだ一週間だからな。様子見様子見」

「うん……そうだね」

「得てしてこういうのってしょうもない事が原因だったりするんだよ。恋わずらいとか。ははっ」

「タク兄ちゃん、ひどい。でも恋とかだったら笑えるね。そんな事でこんなに心配させんなよって。アハハ」

しかし、事態はそんなのんきなものではなかった。かなりのつぴきならないものだったのである。

そしてその事件が起こったのは、その翌日だった。

ズドドドド！ と工事現場のような音が、朝っぱらの我が家に響いた。リビングにいた僕と春香は、びっくりして音源の方向を振り向く。

「え、階段かな……？」

「お、おう……ちょっと待ってる、僕が」

僕が見てくる、と言う前にリビングの扉がギギギギ……と開く。
油ささなきや。いや、ともかくゆっくりと開いてゆく。だが誰もい
ない。

しかし、最初に気づいたのは春香だった。

「ギャー！ トモ兄ちゃん！？ どどどどうしたのー！」

廊下に倒れているらしい兄さんの手が、扉を必死に開いているのだ。
慌てて二人で駆け寄って、兄さんを助け起こす。階段から落ちたの
だろう。

「に、兄さん！ 大丈夫か！ どこが痛い、どこか折れてる？」

「トモ兄ちゃん、救急車！ 救急車呼ぶからあ！」

だが兄さんは、携帯を握った春香の手をぎゅうううと握った。
渾身の力で。

「い、痛いよトモ兄ちゃん！ 離して、電話出来ない！」

「だ、だめ、だ……救急車も警察も呼ぶな……！」

「なんで！」

兄さんの顔がグルン！と僕の方を向く。血走った目がこわい。大丈
夫か、って大丈夫じゃないよな。

「た、頼む……拓海……！ クスリ……クスリをくれ……」

「はあっ！？」

「クスリ！？ クスリってどういうことタク兄ちゃん！ まさか兄
ちゃんをこんなにしたのは……！」

春香、僕をゴミを見るような目で見るな。

しかし兄さんはさらに錯乱している。ゾンビのように震えながら僕に両手を伸ばしてくる。

「拓海いいいい、クスリイ！ 拓海がくれるクスリが欲しいいいいいいいいいいい！」

「いや、ちよつと兄さん！ クスリって何！ は、春香そんな目で兄ちゃんを見るな！ 僕何もやってないってば！」

その時僕は気づいた。兄さんが手に握りしめた薬瓶。それにやたら見覚えがあることを。白坂印のポーションだ。おい白坂、てめえ。

白坂さんがミスってなんか変なもん入ってたに違いない。やっぱり、餅は餅屋、薬は薬剤師ってことか……。というか兄さん、僕それ患者さんにこっそり投与したりしてんのかと思ってた。自分で飲んだのかよ。

と冷静に考えてる場合じゃないので、とりあえず僕は兄さんを抱えて椿の生垣を目指すのだった。

白坂てめえコラア、よくもウチの大黒柱をポーションジャンキーに
しやがったな。

と罵倒する予定が、今僕は薔薇の咲き乱れる和洋折衷風庭園も美しい
堂本邸へ来ております。広い座敷にフカフカの布団に寝かされた
兄さんと、お抱え医師。豊縁に家紋らしきものが金糸でビッシリ刺
繍してある。セレブ気分ここに極まれり。

どうしてこうなったかというと、単に椿の生垣を抜けると堂本さん
にバツタリ会っちゃった上に「うちに医者いるけど？」と水をむけ
られたからである。

どうやら堂本さんは白坂さんに会いに行く途中だったと推察される。

いや、やはり美人はいい。

最近僕は白坂さんってちょっと可愛いんじゃない？地味だけどいい線
いってんじゃない？などとトチ狂った事を思っていたわけだが、気の
せいだった。ちょっと一緒にいすぎてハードル下がってた。

見よ、この光度！ いやあ眩しいわ。あたりを払拭してるわ。白坂
さんがホタルだとしたら堂本さんは恒星ベガだ。

「うーむ。ミツマタスズランですかね。中毒症状は軽いので、まあ
養生すれば良くなるでしょう」

堂本家お抱え医師が、ザ・異世界な感じの診察をした後にそう診断
を下した。いやすごいわ。なんか目からビームみたいなの出た。
それで体をスキャンするみたいにしてた。血液検査なんか呪文唱え
た途端にプシャー！と兄さんの指先から血が出て、それが文字と数
値を空中に描いていた。ここって医療機器メーカーとか無いんだろ
うな……。

堂本さんが僕を見て、からかうように笑った。

「うちで良かったね」

「え？」

「ミツマタスズラン、医師ギルドに所属してる人に診てもらってたら通報義務あるよ。麻薬だからさあ」

「……………」

白坂の野郎……。

僕が脳内で地味っ子白坂をボコボコにしているうちに、堂本さんは医師と部屋を出てゆく。布団に横たわった兄さんを眺めながら、僕はふーっと長い息を吐き出した。

「良かった……」

兄さんが無事つばくて本当に良かった。うちは兄さんで回っているというのもあるが、兄さんが僕のせいで身体を壊したりしていたら僕は一生自分を責めたんじゃないかと思うからだ。

兄さんは、真面目で嫌味で口うるさくて鬱陶しいけど、僕の家族なのだ。

何かおかしいことになっていたら、僕は自分を責め、そしてたかが他人の白坂さんを脳内じゃなくてボコっていたらう。あ、でも白坂さんって魔女っ子だよな。僕負けるじゃん。じゃあ白坂さんの魔法知識を骨までしゃぶってから白坂さんをボコってやろう。お前が育てたのはお前の死神なのさ。これ決め台詞じゃね？

そんな想像を楽しくしているところに、兄さんが目を覚ました。兄さんは家を出たところくらいからずっと気を失っていたのだ。

「……………拓海？」

「あ、起きた。気分どう？ どっか痛くない？」

「ああ……」

兄さんは天井を見つめる。天井に天井画が描いてあるんだけど。堂本邸スゲー。

「何だか長い夢を見ていた気がする」

「あー……麻薬入ってたらしいからね、兄さんが飲んだたポーシヨン」

「後から貰ったやつだろ？ 一番最初のエクストラは多分無害だったと思う。植物にかけても大丈夫だったし、一瞬で切り傷を治すくせに俺の血液検査の結果は何の問題も無かった」

「後から貰ったやつは白坂印だからね。素人作だもん。本当ごめんなさい、兄さん。貰った金返すよ」

「そうだな、金は返して貰うとするか。で、ここがお前の言っていた魔界とやらか？ 随分豪勢な所だな」

「……………」

兄さん、魔界じゃなくて魔法世界です。まあいいけど。

そこに堂本さんが戻ってきた。漆塗りの器を持っている。

兄さんは堂本さんを一瞥して、僕の方を向いた。

「彼女はなんだ？ 魔界の姫か？」

「堂本百合子さん。お金持ちのお嬢様」

姫発言にビビりつつも、端的に説明する。堂本さんは冗談だと思ったのか、口の端だけで笑ってから、僕に器を渡してきた。

「これ、お兄さんに食べさせてよ。身体にいいから」

差し出された器には、粥が入っていた。白粥じゃない。中に卵と、

茶色い葉が刻んで入れてある。

しかし僕はアワワワワ、となっていた。何がアワワワワワかという、堂本さんが引いちゃいけないトリガー引いちゃったからだ。兄さんの目がキラリと光ったのが僕には分かる。

何のトリガーかというと、

「エビデンスは？」

出たー。案の定出たー。兄さんの『エビデンス取ったのか攻撃』。兄さんは「これは健康にいい」的な全ての言葉を蛇蝎のように嫌っている。証拠はあるのか、というわけだ。

これが出ると食事がますぐる上に糞ウゼエので僕と春香は極力発動トリガーを引かないようにしているのだが、堂本さんは当然何がトリガーか知らないのだ。

兄さんはムクリと起き上がった。さっきまで頭が上がりなかったのに。

そして、堂本さんをひたりと見据えた。使命感に燃えた目である。

「堂本百合子さんと言ったか。あんな、俺はそういう曖昧な『身体にいい』という言葉がとも嫌いだ。エビデンスは取ったのか？」

取ってないんだろ？ だとしたら一体何を基準に？ 取っていると仮定しても、どれだけの人間に何年間継続して食わせて、食わせてないグループに比べてどれだけ健康に長生きできました、というデータは？ それに対象が喫煙者が非喫煙者かでも結果は違うだろうし、太っているかそうでないか、遺伝的に問題がないかどうか、それから、」

「兄さん、ストップ」

僕は兄さんの口に粥のスプーンを突っ込んで黙らせた。うぐ、と兄さんがスプーンを銜えたまま僕を睨む。兄さん、キモイです。

「堂本さんは親切にも兄さんを医者に見せてくれて、食い物まで用意してくれてるんだよ。そんな人に向かって失礼でしょうが」

粥を飲み下した兄さんは、ヒョイと片眉を上げた。

「俺はそういう事に左右されない。恩とか情とかアホらしい。愛情がスパイスだという言葉も嫌いだが長くなるからそれは置いて、情とやらでメシが食えるか？ え？」

「今食ってる粥は？」

兄さんは粥を見てから堂本さんを見た。

「俺が言っているのはそういう意味じゃないが……まあ、そうだな。情で継続的にメシを食うのは無理だが、一食は頂いたか。礼は言う。ありがとう、堂本さん」

堂本さんはピンク色の唇を薄く開けて、兄さんを見ていた。その様子が余りにも美人なので分からなかったが、どうやらポカンとしているらしい。お嬢様はポカンも上品だぜ。

兄さんをポカンと見つめて、それから堂本さんはクスクスと笑った。

「お兄さん楽しい人だね。……わたしのこと知らないのに、こんな事言う人って初めて」

わたしのこと知らないのに。そのセリフ、前にも聞いたような。だがそんな事より、堂本さんが兄さんの頬に顔を寄せているのは何。チュッて何。

ほっぺにチュッてされた兄さんは、堂本さんを異星人を見るような目で見ている。デジャブだ。

その視線を気にせず、堂本さんはスツと立ち上がった。

「じゃ、ゆっくり食べてね」

そう言い残し、背中を向けて片手をヒラリと振って部屋を出て行って、その仕草はなんとも粹な……ってオイ。なんかデジャブすぎる。

「……何だ今のは」

知らねえよ。

何だかおかしな事になっている。兄さんが粥を平らげて、頃合いを見計らった頃に様子を見にきた堂本さんに見送られ、僕らは堂本邸の玄関に立っているのだが。

「世話になりました……」

そう言うのは兄さんだ。

「うん、全然いいよ……」

これは堂本さん。

「……」の部分は、堂本さんと兄さんが見つめ合っている部分である。僕は路傍の石のようにスルーされている。

薄暗闇の夕暮れだ。その夕暮れの中、玄関付近の生垣には弱く発光するように白いクチナシが咲いている。クチナシっていつの花だ。

季節感無視な気がするがまあいい。

そのクチナシの芳しい香の中で、二人はとにかく見つめ合っている。堂本さんがふと目を逸らして、何かを呟いて手を振った。次の瞬間、堂本さんの織手には見たことのない見事な青い花があった。

「これ、あげる」

青い花が兄さんに差し出される。兄さんは魔法を使われたことに気づかず 堂本さんの目をじっと見つめてたせいで多分見えてないんだろうが 花を受け取った。

受け取られたことに対して、堂本さんがひどく恥じらった顔をする。何か特別な意味がある花なんだろうな。今度白坂さんに聞こう。

兄さんはしばらく堂本さんを見つめて、軍人のようなシュツとした回れ右をした。そして、肩ごしに「帰るぞ、拓海」とカッコつけて言いながら歩いてゆく。うざい。

だがうざいと思ったのは僕だけで、堂本さんは兄さんの遠ざかる背中をうつとり見ながら問いかける。

「……ねえ。お兄さん、彼女いる？」

「彼女どこるか友達もいない」

と、さり気なく兄を下げる僕。血は繋がってなくとも、嫌な奴という点ではそっくりの兄弟である。

だが堂本さんはパチパチと長い睫毛を揺らしたあとに微笑んだ。

「そう、カッコイイね」

「えっ」

「友達いないとか堂々と言えるお兄さんってカッコイイじゃん。見栄を張るなって、堂本家の家訓なんだ。うちのママ、家訓に従ってシワもそのままだし白髪も染めてないし」

堂本ママの白髪などどうでもいい。僕は「そうなんだ」とだけ言っ
て堂本邸を後にした。

この後、迷子になった兄さんを探して三十分歩きまわった僕がどれ
だけ不機嫌だったかは言うまでもない事だろう。

「本当に、本当に申し訳ありませんでしたあ！」

白坂家である。

僕の目の前で、白坂（呼び捨て）が額をフローリングに打ち付けて土下座している。

色々と腹に据えかねる出来事があつたので、僕は兄さんを堂本邸から連れ帰った昨日、まったく眠れなかった。

ポーシヨンジャンキーになつてた兄さんを思い出しては、おのれ白坂め！ムカー！と寝返りを打ち、兄さんのほっぺにチュな堂本さんを思い出してはキーツ！と寝返りを打つ。

あまりの美人っぷりに気づかなかつたが、堂本さんはかなりの変人だ。兄さんのあの糞ウゼエ説教を聞いておきながら、何故兄さんにウツトリしちゃうのだ。大体僕が白坂の彼氏で悔しいと言つてたじゃん。あれは何だったのさ。

まあそんな訳で思考の80%は堂本さんの事だったわけだが、ともかく僕は朝になるのを待つて白坂家に怒鳴りこんでいるというわけだ。

オラア！と乗り込んで事情をかいつまんで説明した僕に、白坂は真っ青になつて土下座しはじめたのだ。

そして土下座の合間合間に何故あんなつたかを説明してくれた。どうやら白坂は軍部ヘミツマズズランが主成分の薬を納めているらしい。突っ込んで聞くと殺伐とした話になりそうなのでスルーしたが、ともかくその薬を作った鍋を使つてポーシヨン作っちゃったそうなの。なんとという凡ミス。

「本当、申し訳ないです！ 申し訳ありませんでしたあ！」

グリグリとフローリングに額をめり込ませる白坂は、もう既に「申し訳ありません」を百回は言っている。申し訳ありませんがゲシュタルト崩壊しそうなので、そろそろ止めてやる。

「……もう謝罪はいいよ、白坂さん」

さん付けしてしまった。で、でもまだ許してなんかないんだからね！ 僕は肩をコキンと回して、座りなおした。

「謝罪はもういいんだけど、困ってるんだよね。ズバツと言うと、今までの労働報酬のことなんだけど」

「だ、だよー……そうだよー……」

一度は顔を上げた白坂さんが、またペシャンとへこむ。

「今までの労働報酬と、あと柿ノ木さんのお兄さんにも慰謝料いるよね。本当にごめんなさい……」

「それプラス、堂本さんちの医者にも診察料払ってよ」

「そうだね」

白坂さんは真面目な顔でこくりと頷く。

「その堂本さんとやらの抱え医師って、かなりの凄腕だよ。診察内容とお兄さんの回復具合の話を聞いてると、多分血中のミツマタスズラン成分を抜いてくれたんだと思う。レベル6だよ、それ」

「そうなんだ」

「うちに来てくれてても、そこまでの治癒は出来なかった。……わたし、後から堂本さんとやらの家調べてお礼に行ってくるから」

「そうしてくれると助かる。でも『とやら』は付けないほうがいいと思うよ」

「分かった。……で、柿ノ木さんへのお支払いの件なんだけど……」

白坂さんは床にぺたりと座ったまま、ホウと溜息を吐く。

「どうしようかな。貯金下ろして払いたいけど、柿ノ木さんの世界じゃ使えないでしょ、多分」

「うん、現金は困る。だから今までもポーションを………って、あれ？」

柿ノ木さんの世界？ 現金が使えない？ 何故そんなセリフが出てくる。

びつくりしている僕に、白坂さんは困ったように笑った。

「……前に『異世界から来てるんだ』って言うてくれてたのに、信じなくてごめんね。柿ノ木さんは異世界人なんだよね」

「……………」

「この前、柿ノ木さんが魔法見せてくれた時に分かったの」

「……………」

「柿ノ木さんの世界にも『小沢さんちの椿の生垣』っていうのがあるんだよね。こっちにあるのはこっちの『小沢さんちの椿の生垣』であって全く2つは別物なんだけど……でも柿ノ木さんの無意識下の特異な魔力が2つを繋げるには十分すぎるほど発動要件を満たしている、」

「ちよつと待つて。よく分からない」

白坂さんは立ち上がって、一度天井を見つめた。……いや、見つめたのは天井じゃなく、白坂さんの良心だったのかもしれない。ともかく、そうしてから、また頭を下げた。

「ごめんなさい。わたし、柿ノ木さんを利用しようとしてた」

「……あー……」

「実は柿ノ木さんは……柿ノ木さんの魔法は……」

そう言えばそうだった。なんか僕に魔法教える何らかのメリットありそうな風だったよな、白坂さん。すっかり忘れていた。でも僕としては、だ。

「うん、まあそれは後でいいから。先に労働報酬の話をしようぜ」
「………あ、そうだね。スミマセン………」

超深刻っぽい話をしようとしていた白坂さんは、脱力したように謝ってくれたのだった。

話し合いの結果、とりあえず白坂さんからは宝石をいただくことになった。店に持って行って鑑定してもらわないとサッパリ分からないので、ひとまず小粒のルビーを頂く。

天然ルビーではないが、魔法で作ったもので、魔法使いが鑑定してもどっちが天然だか分からないらしいのだ。

白坂さんは不安顔だ。

「これ、本当にお金になるの？」

「分からないから帰って調べてもらう。金にならなかったら、他のものを考えようよ」

そうして話がついた後で、白坂さんはお茶を入れてくれて、そしてあの話を切り出してきた。僕の魔法についての話だ。

ちゃんと椅子に座った白坂さんは、緊張した面持ちで僕に一枚の便

箋を差し出してきた。

「何これ。手紙？」

「そう。でもこれは本物をわたしが書き写したもので、本物の手紙は国立魔法博物館に展示してあるんだけど」

「博物館？　なんか昔の偉い人とかの手紙なの？」

「うん。この手紙を書いた人は、異界渡りと呼ばれる特殊魔法をレベル9、つまり最高レベルまで使える大魔法使いなの。この手紙はね、その人がレベル9の魔法を使って最後に行った世界から届いた手紙」

「ふうん」

「異界渡りっていう魔法はそれ自体がとても特殊で、使える人は百年に一人出るか出ないかなんだよ。そして多分、柿ノ木さんはこの異界渡りの使い手なんだと思う」

異界渡り。

その魔法について、白坂さんは淡々と説明してくれた。

「世界はここや柿ノ木さんの世界以外にも沢山あるんだよ。その違う世界から違う世界に渡る魔法を、異界渡りっていうの。わたしは柿ノ木さんの世界に伝言魔法を飛ばしたけど、それとは全然違う魔法」

「……」

「異世界はすごく似てる世界から、全く違う世界まで色々ある。異界渡りは、似てる世界ほど簡単に渡れるの。多分、ここと柿ノ木さんの世界はとても似てるんじゃない？　魔法知識もなく、『小沢さんちの椿の生垣』という共通認識だけで、柿ノ木さんはここに渡ってきたんだから」

「僕の兄さんも渡ったよ、昨日」

「身体に触れてなかった？　異界渡りは、自分以外の人間にも触れ

てさえいれば連れていけるよ」

「……………」

「わたしは柿ノ木さんに魔法を教えて、異界渡りをレベル9まで使ってもらいたかった。わたしをレベル9でしか行けない世界へ連れて行って欲しかった。それがわたしの目的」

「レベル9ってそんなに簡単に使えないだろ。確かレベル7でも難しいって」

「そうだね。でも柿ノ木さんは使える。あの日の魔法は、この手紙を書いた人が最後に行った世界から、ある物体が紛れ込んできたと思えないの。多分無意識に渡りかけてたんだと思う」

「ある物体って桜の花びら？」

聞くと、白坂さんは瞬間目を見開いた。

「……………気づいてたの？」

「うん、桜って聞こえた気がした。白い何かも見えたし。でもね、白坂さん。桜の花びらなんてどこにでもあるよ。僕の世界にもある。今の季節はまだ早いけど、狂い咲きの桜なんかそこらにあるさ。その手紙の人が最後に行った場所じゃなくて、僕の世界の桜じゃないかな」

「違うよ」

「何で分かるの？」

白坂さんは、便箋を指した。

「まず、それを読んで。それから話した方がいいと思う」

僕は肩をすくめて、便箋を開いた。

ここには見渡す限り満開の桜が咲きほこり、さらさらと音を立てて花びらを降らせています。

地面は花びらで薄紅です。これは指でそつと摘まなければなりません。力をいれると、すぐにカサリと粉々になるのです。

注意深く花びらを拾って口に含むと、ひんやりと冷たくて、すぐに甘く溶けてしまします。もう随分降り積もっているので、歩くと霜を踏むような軽やかな音がします。

空には僕が好きなピアノソナタがかすかに流れています。

小川には清水が、そしてその横にはこんこんと酒が湧く泉までがあるのです。

風は淡く馨しい香りがします。ほんのりと明るくて柔らかい光が、どこまでも差し込んでいます。

一面の薄紅の地面から、ドクオオイヌノフグリがぽつぽつと可愛らしく顔を出しています。可愛いなと思うやいなや、たくさん増え、まるで嬉しがるように青い花弁を揺らしています。

ぼくは父さんを振り返りました。「父さん、嬉しい？」と聞きました。

父さんは生前と変わらない大きな身体で、鼠色の作業着を着ています。嬉しいぞ、ありがとうと言って、ぼくを抱きしめました。埃と油とタバコの匂いが優しくぼくを満たしてゆきます。この匂いを、ぼくはどれだけ求めたことでしょう。

隣で母さんが笑っています。一度も話したことがない鈴原塔子さんもいます。彼女は僕の近所で一番大きな屋敷に住む、気が強そうな美人です。一度も話したことはないのですが、ぼくがずっと好きだった方です。

見ると、ぼくの鼻根の落語家までがきつちりと着物を着込んで、あらぬ方向に向かって、僕が一番好きな嘶をかけています。そちらには黒い木しかないのに。慌ててそちらへ行こうとしたら、塔子さんがぼくの腕をびしやりと叩いて言いました。

先にわたしと結婚して！

ぼくは笑いました。

そうして、ずっと笑っていたのです。

ずっとずっと、永遠の桜吹雪の中でずっと。

読み終わり、黙って白坂さんの顔を見つめる。

なんとも気持ち悪い手紙だ。どこかが狂った、変な文章。白坂さんは僕の顔を見つめながら静かに言う。

「あの桜の花びらは甘かったよ。手で擦ると砕けた。指を舐めたらひんやりして甘かった。……柿ノ木さんの世界の桜も、甘くて冷たいの?」

しばらくの沈黙があつた。僕は、白坂さんに尋ねた。

「この手紙書いた人、どこに異界渡りしたの? これ、一体どこからの手紙?」

白坂さんは黒い瞳を熱っぽく潤ませて、答えた。

「天国よ。レベル9の異界渡りは、天国に行けるの」

僕は初めて気がついた。

目の前の少女も、少しだけ狂っているのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1835z/>

異世界のゴミ屋敷

2011年12月21日12時54分発行